志願兵訓練所の一日[[1]](#footnote-1)

香山光郎

十月十二日、朝鮮文人協會員一行三十八名は、朝八時半城東驛前に集合、墨洞の陸軍兵志願者訓練所へ向つた。この日天氣快晴、沿途稲刈に忙しい。

平素蟄居癖のある文人連のためには、舊交を暖める格好な機會ともなつて、車中も賑やかだつた、朝鮮軍の蒲少佐も今日一日は文士になつた氣であの難かしい顔が始終綻びてゐた。米三合持參の風呂敷包、紙包を下げて、十一時、一行は訓練所に着いた。所生の一隊は正門外に整列、一行を迎へて呉れ、他の一隊は廣い運動場で有田所長から何か訓辭を受けてゐた。

一行は階上の訓話室に案内され、所長海田大佐から、細細と訓練所に關する説明を頂いた。現在収容生徒一千名、全鮮各郡から洩れなく數名づゝ出て居つて、済州島四名、鬱陵島二名と地圖に記してあるのが眼についた。

筆者は昨年も參觀して今日同様海田所長の説明を拜聽したのであるが、何時に變らぬ大佐の熱誠には度々[涙]ぐまざるを得なかつた。李仁錫、李亨洙、兩君の戰死のことや、朴宗華君の武勲のことなど話される時には、その眼は光り、聲は幾度も詰まつた。今日も鄭銅岩[[2]](#footnote-2)（改名松山）上等兵が精勤章四本を戴いたことを話されるに及んでは、眼は光り聲は嗄れた。わが子を思ふ親心だ。

　師範學校を卒業して、教職にあつたもの三名が、軍隊生活の體驗なくしては、將來將兵になるべき小國民を訓育するのに身が入らないといふので、志願兵になることを決心し、今やその教へ子[[3]](#footnote-3)ともいふべき他の生徒と伍して眞面目に懸命にやつてゐるのを見る[と]感激せられるといふことを繰返へし繰返へしいはれるのであつた。この三人は或は級長、或は班長としてまめまめして他の者の世話をしてゐるさうである。

　それから教室廻はりで、海田大佐は終始先頭に立たれて案内と説明の勞を取られた。廊下も床も、三年近く數千の人に履まれたものとは思はれない。たつた一週間ばかり前に板を張り換へられたやうに淨らかで、生地の白味がそのまゝ保存されて、しかもぴかぴか光つてゐる。

「清潔は日本精神だ、日本人は神を拜むが故に、身體も住居も、いつも清潔にしてゐるのだ、といつて生徒達に清潔の訓練をしてゐます」

といふのは、客秋海田所長が、廊下や便所を見せながら私達に説明したことばであつた。

教室では、生徒達は床の上に半跏坐のやうな坐方をしてゐて、所長が入ると、教官の氣を付けの號令に端坐の姿勢を取り、所長や一行が室から出ると、休めの號令にもとの胡坐に返つたが、それでも、上體は眞正にして居り、眼は一刻の緩みもなく教官に注がれてゐて、今にも何か跳びかゝりさうな緊張と精悍さを示してゐた。

教官に何かを聞かれると、生徒達は手を擧げるのであるが、拳固をきゆつと握つて空を突くやうな氣合であつたし、「はい」とか、「さうであります」とかいふ答も、力限りでびつくりさせられる程で勇ましかつた。

教室を一巡廻つて、私達は寝室を見せて貰つた。豫算の議會通過が遲れた關係上、まだ建物は出來てゐないのに千餘名を収容してゐるので、寝室を全部除けてしまつて、床の上にマトレスを敷[き]八人部屋に二十三人も収容してゐる[と]のことである。

　生徒達の食器袋や持物函など開けて見せて貰つたが、今期生は八月入所で二個月位しか經つてゐないで、毛布の畳み方、積み方、書籍や身の廻りのものの整理に、行届かぬところがあるといはれたが、われわれの眼には隨分きちんとしてゐるやうであつた。

　「あと二ヶ月で卒業、十二月には晴の入營をするのですが、そのときになれば、生徒たちは身體と心も、立派な軍人らしくなるのです」

と海田大佐はわが事のやうに喜んでゐられた。

「この便所の下駄ですね、これをちやんと後の人のために揃へて置く、といふことがまだ徹底しませぬ、これも一月ばかり前からやつときちんとするやうになりました。」これも昨年海田大佐が説明されたことであつた。

「すべての物を秩序正しく整理する――これは實に大切な訓練です。もし夜中に敵の襲撃があつた場合燈火を全部消して、眞暗闇のなかで、音も立てず武装をしなければならない、だから、自分のものは何處其處に何があるかといふことが手捜りでちやんと解るやうにして置かなければならぬのです。」

　これも海田大佐の説明であつたが、聽いてゐて自分が恥かしくなつて苦笑を禁じ得なかつた。

　何時敵に襲撃されてもまごつかぬやうに、手抜かりのないやうに平素心掛けるといふのは單に軍人精神ばかりではあるまい。われわれも、何時死んでもあわてぬやうに後悔せぬやうに、すべきであらうと思はれた。

一行は一應先刻の本據へ歸つて晝食を取ることとした。麥五分の御飯が一椀、里芋と小鯛の甘煮一皿、澤菴、おしんこといふ獻立だ。

「おいしい。とてもおいしいですな」

の連發だ。ほんとうにおいしかつた。

　「御飯は澤山焚くからおいしいのです」と海田大[佐][[4]](#footnote-4)はわれわれがぱくついてゐるのを満足[さ]うに見ながらいはれた。

　「これが生徒たちの食事と同じものです[。]軍隊でもこれですよ。これで榮養は十分あります」

　これは蒲少佐のことばだ。

　「生徒達の大部分は入所の時には胃擴張をもつてゐるのです。平素食ひ過ぎてゐるのです。それで始めの一個月は空腹を感じるらしい、それが二ケ月目からは胃擴張が直つて、めきめき太つて來るのです。また大概は寄生蟲をもつてゐたのがそれをすつかり下してしまふせゐもあるでせう。六ケ月に二貫目も體重が殖えたものもありまして、平均して一貫目以上は殖えます。」

これは朝鮮の家庭全體で參考すべきことばだと思つた。

「よく咀嚼することが大事です。」

とも海田大佐はいはれた。不十分な咀嚼で三碗の飯を食べるよりも十分咀嚼した二碗の飯の方が榮養が多いさうである。だから訓練所では、食事の時間を一時間も取るさうだ、各學校の生徒の晝食時間は再考慮の必要がないであらうか。

私達は曲線によつて示された、訓練所生徒の平均體重の増加のことを聞かされて「食過ぎ」の弊害をしみじみ感じた。そしてわれわれの家庭經濟は、食事の合理化によつて、保健的効果を増大しつゝ、金錢的に切り詰められる餘地がある[と]思つた。それは全國的に見れば、恐らくは毎年何億といふ莫大な額に上ることであらう。厨房の新體[制][[5]](#footnote-5)は、愈々忽かに出來ないことである。

　「皆さん、これ[か]ら、生徒たちの食事の狀況を御覧に入れませう。」

　海田大佐は晝食を取られたのだらうか、恐らく私達文人に、訓練所の眞相實相を呑み込ませるための執心のあまり、食事のことも忘れられたの[では]ないだらうか。

各室の食事當番は炊事場から御飯やお菜の入つた大きなバケツのやうなものを下げて來る。生徒達は床の上に端坐して、銘々の食器袋から大小四枚のアルミの食器を出して、規定通りに自分の前に並べる。そして順々に御飯とおかずと水を受ける。それが終ると手を膝に置いた端坐の姿勢で、教官の號令を待つ。しんとする。班長は室の入口に氣を着けの姿勢で教官の指圖を待つ。

やがて

「西一區部隊食事してよし」

といふ號令がかゝる。さうすると、全員一齊にあらん限りの聲を張り上げて、

「いたゞきますッ」

と叫ぶ。大變な大聲である。

一行は廊下傳に東の方へ案内されたが、そこでは旣に食事が終つて、教官の指圖を待つてゐる。食事の始めの時と同様だ。食器には御飯粒一つも殘されてゐない。おかずの碗だつて同様で、洗つたやうに空つぽだ。

「一粒の御飯がわれわれの口に入るまでの勞苦を思へ、といつもいひ聽かせてゐるのです。ものを大事にせよ。一滴の水も無駄にするな、一粒の米、一滴の水の依つて來るところを思へ。神の惠みと同胞の勞苦を忘れるな。この精神で食事を取り、この精神で物を使ふのです。」

　なる程、教官の號令で、生徒たちは、洗場で食器を洗つたが、まづ一つの碗に茶碗で一つ位の水を汲み、その碗を洗つたら、今度はその水を次の碗に移してそれを洗ひ、またそれ[を]次の碗に移すといふ具合である。一滴の水も無駄にしない精神の現はれである。

かやうにして洗はれた食器は、布巾で奇麗に拭かれて銘々の食器袋に収められる。これで食事が終るのだ。

これは僧堂でも兵營でも同様で、感謝と秩序[と]清潔と無駄をせぬといふ精神である。家庭の食事もかうあつてほしいものだ。

　食事の見學が終ると、一行は訓練の狀況を見るべく運動場に出た。小春の碧空に一點[の]雲も翳なく、日光はさんさんと半裸體の健兒の黒金の顔や胴體の上に降り注いでゐる。

　「日光浴をさせて皮膚を丈夫にして冬の寒さに備へるのです。二カ月であんなに黒金色になりました」

　海田大佐はかういはれた。

一部隊は半裸體で木劍體操をしてゐた。

「あの生徒たちの乳のところを御覧なさい。餘程ふくれて來たでせう。入所當時はあれがなかつたんです、あれが力瘤ですよ。あと二個月して入營時分になれば、あの瘤が相當なものになるでせう。あれがなくちや駄目です。四個月であれを作らうといふのですから、骨です。猛訓練ですね。ちと可哀想だとも思ふけれども、何も御國のためである、本人たちのためですから、やつてゐるのです。晝中九時間の學課[と]訓練で疲れるものですから夜は皆實によく眠ります。」

「ところが、それを皆喜んでゐるんですよ。後で誰か一人つかまへて、訊いて御覧なさい。傍で見てゐればのやうでもあり、つらひやうでもあるけれども、軍隊生活といふものは[馴]れゝば、それは愉快なもんですよ。一種いはれない味があるものです。」

　これは蒲少佐の體驗談であつた。すべての修行生活は、そんな[も]のであらう。無駄なこと、わがまゝなことを取り除いてしまふまでは、窮屈な思をしても、それらの惡習慣を克服して、それから離れた暁には、解放の喜び、自由の喜びを感ずるものである。軍隊生活は結局人生道場なのだ。

最後に、教職を休職[し] て、兵を志願した三君に會ひ、二三問答を交はした後、海田所長首め教官諸氏に篤く御禮を申し上げて、訓練所を辭したのは午後二時過ぎであつた。

この日訓練所では、海田所長首め實に全員總がゝりで、われわれ文人部隊を接待された。これは、民衆に思想的接觸の多いわれわれ文人に囑望するところ大なるがためであらう。誠に恐縮の至りである。

　この日一行に[加]はつたものは殆んど全部三十五六歳以上五十歳までのもので、どうせ兵役に役に立たぬものだ。自分でも何かの場合に後方警備の一役位とも思つてゐるが、後方警備だつて生やさしいものでは勿論なからう。せいぜい一管の禿筆を呵して、銃後の國民に慰安と鼓吹を與へる位が關の山だ。

しかし、あらゆる職域は、皆國防のために必要でなければならない。筆の職域もさうであらう。文人たるもの應召された覺悟で文章報國に勵むべきであると思ふ。

　一行は萬感を抱いて墨洞驛まで來たが、何んだかそのまゝ別れるに忍びないやうな氣がして、一同果樹園に入り梨を食べながら、訓練所のことや、志願兵のことや、文章報國のことなど話し合つた。特に蒲少佐から文人のために一場のお話があつた。二百五十餘名の朝鮮文人はまさに職分奉公、文章報國のため奮起することであらう。

1. 1940年11月の『國民総力』に掲載され、1941年1月20日博文書館発行の『同胞に寄す』に収録された。単行本を参考に誤字を修正し、印刷不明瞭な部分を補完した。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 原文は「鄭銅志」になっている。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 原文は「喜ぶ」になっている。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 原文は「大位」。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 原文は「體勢」。 [↑](#footnote-ref-5)